

堺の七町



菜の花プロジェクト の菜の花が咲くと、突然春がやってくるんです。まだ冬の二月の半ば、気の早い奴がポツンと咲いたら、次の日は黄色の絨毯のように菜の花が一斉に揺れている。菜の花プロジェクトというのは、「菜の花咲かそうNPO法人」が、大阪の住之江公園で、菜の花を育てて、菜種油をとって、その油を石油に代わるエネルギー源にしようという人類的プロジェクトで、只、残念なことにここ何年かは休止中だったんですが、今こそ、再生の時だと、僕は思っているんです。

住の江や 和泉の街の七まちの 鍛冶の音をきく 菜の花の路

堺の七まち 去年の12月4日、堺の七まちの紀州街道に面した水野鍛錬所で、市内で24番目の、与謝野晶子の歌碑の除幕式が行われました。

七まちは七町で、堺の七町といえば言わずと知れた鍛冶屋さんの町。かつては堺の旧市街（環濠内）の北部に今も残る軒を寄せ合うような下町の家々からは、一日中、「トンテン、トンテン」と平和な槌音が響いていた……？、うん、平和な……？、いえ、いえ、とんでもない、ここは古くは信長の時代に遡る、鉄砲鍛冶や、打ち刃物(包丁や刀ですな)の伝統技術を誇る工房が集まっていたところで、ある意味、日本史を動かしたといってもいい所でしょう。

明治から続く工房の水野鍛錬所では、今でも堺ブランドの包丁や鋏を紀州街道に面した店で展示販売されているんですが、その裏手の鉄砲鍛冶の井上家は、残念なことに、もう火縄銃を作っても売れないそうで、今は建物が堺の文化財として公開されています。いずれにしる、江戸時代から戦前にかけての建物が今も残る七町界隈の保存と活用を図ろうということで、与謝野晶子の歌碑という訳です。

で、歌碑の歌ですが、菜の花の路ですから春ですね……その路を歩いていたら鍛冶屋さんの音が聞こえてくる……「住の江」は大阪の住之江のことでしょうか……違うでしょう……たぶん、これは海が近い所、海の傍の町ということなんでしょう……堺は遠く、ルソンや南蛮に繋がる海の町なんです。

「海こひし 潮の遠鳴りかぞへては 少女となりし 父母の家」

与謝野晶子が少女時代を過ごした頃、市街を外れるとそこにはもう海が広がっていて、海を見下ろす丘の上には春になると、一斉に菜の花が咲くんです。和泉の国は菜の花の国です。そうして、菜の花畑の真ん中の路を歩いていると、風に乗って、「トンテン、トンテン」と歌っているような鍛冶屋さんの音が追いかけてくる……、そういう情景でしょうか、この歌は 。

佐保子 情熱の歌人、与謝野晶子がこの歌碑の歌を詠んだのは、ちょうど百年前の明治43年、32歳の時です。女の厄年ですね。違いますか。いずれにしてももう若いとは言って貰えない。人生の転機を考える時でしょう。

晶子の場合はどうだったんでしょう。彼女は当時、夫の寛（鉄幹）や、5人の幼い子供達と、東京・麴町の借家に住んでいました。当時、女流歌人の第一人者として活躍していた彼女の所には、いろいろな人が訪ねてきます。

例えば、鉄幹の弟子の石川啄木（24）はよく麴町の家を訪ねて来たようで、「最近の晶子先生はほとんど注目すべき作品を作ってえない。そうでねですか」

と、気が小さいくせに生意気な啄木に言われたり、あるいは、熱烈な晶子の信奉者で教育者の平塚雷鳥（24）や、原稿を依頼に来た編集者には

「私の歌はもうあきまへん。もう長いこと、心の奥底で心が動いてしません」

「私はね、お金を稼ぐためにモノを書いてますねん。モノを書いて一家9人を養ってますねん。芸術から遠うなってますねん」

と、苦しい胸の内を打ち明けたりしました。当時、夫の鉄幹には収入がほとんどなく、与謝野家の財政は晶子が一人で支えていたのです。

「別れるというたら別れます。でも9年もの間に5回も出産しました。男なんてヒマなものですよ。お産という命がけのことがないから……」

鉄幹の浮気も相変わらず晶子の苦痛の種になっていたのです。こうしてみるとやっぱり厄年ですね。たぶん碑に刻まれた歌は、奮闘の中にある彼女が、少女時代を過ごした、懐かしい故郷の思い出として詠ったものじゃないでしょうか。

この年、彼女は一人の女の子を出産します。「佐保子」という名前の子で、その前年に晶子は「佐保姫」という題名の歌集を出しています。佐保というのは万葉の佐保でしょうか。佐保で連想されるのは、古事記にある「佐穂姫と佐穂彦」の物語ですが、彼女がこだわった「佐保」という言葉には、この時期の彼女の心の秘密があるような気がするのです。

古代の物語（ここからは古事記の物語から作った物語です）

昔、大地の北の森の中にサホと呼ばれる国があり、佐保彦と佐保姫の二人の兄妹がいた。妹の佐保姫は神の声を聴く者で、兄の佐保彦は妹が聴いた神の意思を民人に伝えた。神はいつの年も、この国の民に豊かな収穫をもたらしたのである。

ある年の春、佐保姫のもとに一人の若者が訪れた。若者は隣国の王で名をイクメイリヒコといった。若者は妻問いのために佐保姫の会いに来たのである。

佐保姫は驚いた。自分に妻問いをするものが現れるなどとは考えたことがなかったからである。若者は王にふさわしい気品と隣とした美しい声を持ち、沢山の光り輝く玉をその身体につけていた。佐保姫は心の高揚を抑えて若者に言った。

「私は神の言葉を聴くものです。神は私と、私の民人に災いをもたらすことは言わない。だから私は神の言葉を聴かねばならないのです」

そう言うと、一人、神の山に向かった。その夜は風が起り、鳥達が騒いで、神が山の頂に下りたことを人々に知らせた。次の日、館に戻った佐保姫は、頭に

花飾りをつけ、美しい刺繍のある衣装を着ると、兄王の佐保彦に、
「隣国の王は、兄王に栄光を与え、民人達に豊かな恵みを与えるものです」
と、告げた。こうして、佐保姫はイクメイリヒコ王の後となったのである。
一年が経ったころ、佐保彦が佐保姫の元に来てこう言った。
「王は私と、私の民人を苦しめている。私は王と戦わなくてはならない。そなたは王に従うか、それともこの私に従うか」
それを聞くと、佐保姫は悲しみの涙を浮かべ、兄王に従うと約束をした。
「それでは、王を殺し、お前と私の二人でこの天の下を治めよう」
と言うと、佐保彦は紐飾りの付いた小刀を佐保姫に握らせ、「これで、王が眠っているところを刺せ」と、佐保姫の耳に囁いた。
佐保姫の心は揺れた。そして幾夜かの眠られぬ夜を過ごした。眠られぬ彼女の耳に「殺せ、殺せ」と囁きかける佐保彦の声が蘇った。
佐保姫は兄から渡された小刀を隠し持つと、王のスキを伺うようになった。或る日、王は佐保姫がそのような企みを抱いたいるとは知らず、愛しい佐保姫の膝を枕にして昼寝をした。今こそ神が与えた好機、こう思うと佐保姫は懐から小刀を取り出し、三度、王の首を刺そうとしたが、その都度、哀しい心がわきあがるのを抑えることが出来ず、首を刺すのをためらっているうちに、涙があふれて王の顔に落ちた。王は驚いて飛び起きると、佐保姫に尋ねた。
「私は妖しい夢を見た。夢の中で雨が降ってきて私の顔を濡らした。それから気が付くと、錦の蛇が我が首に纏わりついていて。これはいかなる験であろう」
その言葉を聞いて、佐保姫は今までのことをすっかり王に打ち明けた。王は直ちに軍勢を率いると、佐保彦を撃つためにサホに向かった。佐保姫は王に攻めたてられている兄王と民人たちのことを思うと、悲しみを抑えることが出来ず、こっそり王宮を抜け出すと、佐保彦が立て籠もる稲城に逃げ込んだのである。
佐保姫は、どうして王を刺さなかったのかと問う、兄王に答えて言った。
「私はイクメイリヒコ王の子供を宿しております。どうして、母となる私にその父親を殺せましょう。でも私は兄王に従うと約束しました。だから私はこうしてこの稲束の城にやってきたのです」
王は佐保姫が稲城に逃げ込んだのを知って、攻めるのを躊躇っているうちに佐保姫は王の子を生んだ。男の子であった。姫は稲城の外にその子を抱いて、王の元に行くと言った。
「この子は王の御子でございます。私を愛しいと思ってくださいますなら、この子をお育て下さい」
王は佐保姫に、そなたは戻ってきてはくれぬのかと聞いた。
「私は王と、兄王を裏切りました。ですから稲束の城で滅びるのが、私の定めでございます。しかしこの子は、王の御子として生きてゆかねばならないのです」
そう言うと、佐保姫は再び稲城に戻って行ったのである。
王は総攻撃を命じた。燃え上がる城の中で佐保彦は佐保姫を見つめて言った。
「私はこの城で民人とともに滅びるのは、神の決められた定めだから仕方がない

が、あの時、神はそなたに隣国の王はサホの民人に豊かな恵みをもたらすと、偽りの言葉を伝えられた。私は神に裏切られたのが残念だ」

「いいえ、神は私達を裏切ったのではないのです。あの時、神は隣国の王は私達に災いともたらすと、私に言ったのです。でもその時、私は神の言葉を伝えるものではなく、只の人間、いいえ、只の女になっていたのです」

再生 そう、僕がこの小文で書きかったのはこれです。この古事記の物語は「再生」の物語だと思うんです。稲城とともに滅びた佐保姫は、炎の中から一人の子供を残す。それは山焼きの炎の後に春がくると新しい草が芽を吹くように。昌子もこの物語に自身の再生を祈っていたと思うんです。そして震災から立ち上がるうとしている人々も同じように。



4月10日 古市古墳群パート

「いよいよです。これからが大変ですよ」

「それで、決まったらどうなるのでしょうかね」

「まず、今貴方が吸ってらっしゃるタバコ、歩きタバコは絶対厳禁ですな」

「町並みの景観なんかも建築基準法が厳しくなっ

て大変でしょう。パチンコ屋なんかもこれからは営業が難しいとか」

「我々の通勤するときの服装も規制がかかるし、今、歩いているこの道の歩き方まで、観光協会のほうで指導があるようですよ」

「大変ですな。世界遺産の町に住むのも」

「そう、なにせ人類の遺産を預かっているわけですからな」

と、いほどのこともないんですけど、まあ法隆寺や東大寺といった代表的な世界遺産のあるところの住民代表としては、意識はしているんです。

実は、国内候補のリスト登録が見送られていた「百舌鳥・古市古墳群」が、昨年6月、ユネスコの暫定リストに掲載されることが了承されたんです。この暫定リストというのは、2007年に文化庁が全国の自治体から募集していたもので、他に平泉や鎌倉、彦根城といった観光地や、飛鳥・藤原の宮都なども含め、14件も立候補しているそうですが、何はともあれ、目出度いことです。

このポコアの「古市古墳群パート」が今年の5月、ポコアの活動も大いに貢献したんじゃないかと思うんですが、こうなったら世界遺産に正式登録されるまで、パート、パートと、ぜひ続けていって下さいよ、麻殖生さん。

今回は麻殖生さんの解説で、迷路のような古墳の町を歩きました。麻殖生さんは古代の迷路に詳しいけど、古市の迷路にも詳しいですね。ここでは家々の屋根やマンションの屋根の向こうに古墳が見える。妙なものです。古墳は千五百年前から変わらないけど、その周りの風景は千五百年の間に、田んぼになり、畑になり、運河になり、学校になり、長屋になり、公園になっている。今から百年後、どんな景色の向こうに、人々は古墳を見るのでしょうか。